

# 国家錬金術師の英雄譚

レルカスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人は何かの犠牲なしに何も得ることはできない

何かを得るためには、それと同等の代価が必要になる

それが、錬金術における等価交換の原則だ

その頃僕は、それが世界の真実だと信じていた

これはある錬金術師の英雄譚である

# 目次

プロローグ

1

一話

11



# プロローグ

アメストリス軍中央司令部。

ここは軍事国家アメストリスの中でも最高権威を誇る軍事施設。

その一室にて、一人の男が黒電話を片手に不機嫌そうに顔をしかめながら話をしていった。

「おい、黒乃。これはどう言うことだ？」

電話口で苛立たしげに文句を垂れる男に、口元に笑みを浮かべながら答える。

「どうもこうも、そのままだ。どうだ、受けるか？」

「ふん、話なららん。悪いが他を当たってくれ。うちはそんなことを気にかけるほど暇じゃない」

そう言つて机の上に先ほど届いた資料を放り投げる。

見ると、そこには国家錬金術師であるエドワード・エルリックの破軍学園への編入と書かれた資料の束であった。

「いいじゃないか、エドワードはもう18歳だ。いい加減そろそろ学園に通わせてもいいんじゃないのか？」

「あいつは国家錬金術師、つまり国家の人間だ。そうやすやすと国外への渡航に許可など出せん。それにやつは日本の高校程度の知識など、とつくに履修済みだ」

国家錬金術師の試験はその程度の知識で突破できるほどヤワなものじゃない。

いわゆる国家の特級なのだ。

ただの一般人でも解けるような問題は出していない。

男の答えに溜息をつきながら答える。

「はあ…… 学校は問題の解き方や戦い方を教えるだけのための場所じゃない」

「何が言いたい？」

「あいつにはもつと同じ年頃の者と接する機会が必要だと言っている、マスタング大佐…… それに例の事件も大方片が付いたんだろ？」

「…… はあ、なぜ貴様がそのことを知っている。機密情報だぞ。それと大佐じゃない。大将だ」

「ふつ、私もそこそこ広いネットワークを持っているからな。それに、あんなに大きな事件に気付かないなんて、私たちの立場上そちらの方が無理難題だ。それで、どうする？」

腕を組みをしてギシリと椅子にもたれかかり、腕を組んで暫し思索した結果。

「…… まあ、ヤツにも少しは休暇が必要か。ここ数年はあの事件で休暇を与えられなかったからな。それに、これ以上働かせたものアームストロング大佐に何を言われるか

わからんからな」

「ほう、随分と物分りが良くなったじゃないか」

予想外に簡単に許可が出たことに驚く。

「ふん、ただの気まぐれだ。渡航の許可は出したからあとは本人に直接話してくれ。あと、一応あいつも軍や国家に関する人間だ。わかつているな」

エドワードかて国家錬金術師という特権を持った人間だ。階級で行くと少佐。

それにあいつにはそこらの少佐と同系列には扱えないほどの功績を残した者だ。

故に先の会議により、中佐への昇格が行われたばかりである。

そこいらの者と同程度の待遇をされたら軍の面子にも関わってくる。

「わかっているさ。本人にはこちらが問い合わせよう。それと彼には悪いが、一応2年というこことでも入ってもらうことになるが、いいか？」

「構わん。あとエドワードにくれぐれもこちらに面倒ごとを持つてくるなど伝えておいてくれ。頼むぞ」

「お前も苦労しているんだな。伝えておこう、それではな」

それだけ言うとうと電話が切れ、椅子にもう一度深くもたれかかり、一度ため息をついてコーヒーへ手を伸ばす。

電話をする前に部下であるホークアイ中佐が入れたコーヒーは、入れ立てとは程遠く

ぬるくなってしまっているものの、今はできるだけ思考を鮮明にしたかった。

煎った豆の香ばしいコーヒーの香りと、コーヒー独特の苦味が頭をクリアにする。

「はあ…… 次から次へと厄介なものに巻き込まれて」

溜息をつき、これから起こるであろう面倒事を頭に浮かべながら眉間あたりを指で抑える。

それからしばらく頭を悩ませながらコーヒーを堪能していると扉をノックする音が聞こえた。

「…… 入れ」

そう言うのがチャリと扉が開き、直属の部下であるホークアイ中佐が入ってくる。

「失礼します。 マスタング大佐、ご報告したいことがあります」

「今はもう大将だ、中佐もいい加減覚えてくれ。 いや、わざとか…… はあ、それなんだ？」

「またも面倒ごとかと顔を思わずしかめそうになる。」

「マスタング大将、 エドワード君の件についてなのです」

「ああ、今黒乃から電話がきた。 一応本人の了承があれば了承する旨を伝えたいところだ。 後で日本行きの飛行機でも取っておいてやってくれ」

「あの、それなのですが……」

「なんだ、何かあったのか？」

ホークアイ中佐は言いにくそうな表情を浮かべながら答える。

「彼、エドワード君から朝、電報がありました」

「そうか。それで？」

一呼吸置き、意を決して答える。

「彼は今……」

「なんだ、何か任務でもあったのか？」

「いえ、その……」

す

彼、すでにもう日本にいるそうで

「……………」

その言葉に、溜息を吐き出し再度椅子にもたれ掛かり、天井を仰ぎ見る。

「そうか……………」  
「ホークアイ中佐、電話を」

「……………」  
「はい」

ふつつつと煮えたぎる怒りが徐々に溜まっていき。

ついに爆発した。

「……………」

あんのクソガキがああああああ

!!!!!!!

」

都内某所。

「ヘックシ！誰だ？俺の噂してるやつは」

長い金髪を後ろでくくり、同じく金色の瞳を持つ青年、エドワード・エルリックは、マスタング大将の知り合いだという黒乃という人物を訪ねるべく、科学技術の大幅な進歩を遂げている日本へと渡航していた。

「しかし、流石にマスタング大将に言わなかったのはまずかったか」

先ほど届いたマスタング大将からの怒りの電話に冷や汗を流したエドワードは、帰国した時に起こるであろう惨状を思い浮かべた。

「ま、来ちまったもんは仕方ねーか！それより破軍学園つてのはどこだ？」

素早く切り替え、再度先日届いた手紙を見返す。

破軍学園へと招待としか書いていないその手紙は、校長の直筆サインしか他に書いておらず、行き方などは何一つ書いていなかった。

「とりあえず聞いてみるか。すんませーん！」

声をかけたのは、同じ歳くらいのも、綺麗な茶髪を三つ編みにした眼鏡の少女だった。「はい？どうかしましたか？」

「この破軍学園つてどこにあるか教えてもらいたいんだけど」

少女はエドワードの言葉に一瞬キョトンとし、あ、外国の人だからかなと納得する。

「何かご用でも？」

「いや、こここの理事長の黒乃さんだったか？に呼ばれたんだよ」

「理事長に？」

そう首をかしげる少女に先ほどの手紙を見せる。

「確かに理事長のサインですね。わかりました、それでは私に付いてきてください。私も今から行くところなので、一緒に案内しますよ。私、この学校の生徒なので」

「お、マジかつラッキー！んじゃ頼むわ」

「ふふ、それでは付いてきてくださいね」

エドワードはそう言つて歩き出した少女の後ろを付いて歩いた。

「そういうえば、破軍学園にはどういったが用事で？」

外国の人であるエドワードは、日本人からすと見ようによつては年上に見える。

さらに昔からの悩みである身長も徐々に伸びていき、今では成人の平均まではいかないものの、そこそこに伸びていた。

故に20過ぎと言われても遜色がなかった。

「俺、そこに編入するんだ」

「編入ですか？珍しいですね。というか歳が近かつたんですね。それに理事長の推薦なんて」

「俺も結構びっくりしたよ、この手紙が届いたときは」

「そうですね、学校の方は大丈夫なんですか？」

首を傾げながら聞いてくる。

「俺、一応軍人だからさ。学校には行ってないんだ」

「あつ、すみません。不躰な事を聞いてしまつて」

申し訳なさそうに目尻を下げながらシユンとしている彼女に首を振りながら

「いや、そんなこと。俺も別に気にしてねーし、それに今から俺もその仲間入りつてわけだ」

明るく笑顔で答える。

そんなことを話していると、目の前に豪壮な建物が見えてきた。

破軍学園である。

「あれが破軍学園ですよ。あちらの階段を登った先が理事長になりますので」

「あれがか。随分でけーな!!サンキューな、案内してくれて。えっと……」

「そういえば、まだ自己紹介がまだでしたね。私、ここ破軍学園の生徒会長を務めさせていただいています、東堂 刀華と申します」

改めてこちらに向き直り自己紹介をした彼女、東堂がまさかの生徒会長だということに驚きながら、エドワードも自己紹介をする。

「俺はエドワード・エルリック!鋼の錬金術師だ!」

これは、鋼の錬金術師、エドワード・エルリックの英雄譚である。

## 一話

その後、東堂の案内通りに校内を進み、理事長室に入ろうかと考えていたその時。

「アツツ!!?!」

中からかなりの熱量のエネルギーが発せられ、ドアの隙間から熱風が吹き出てきた。

「……………入りずれえ……………はぁ」

長年の経験上、今はいると確実に碌でもないことに巻き込まれるだろうことは容易に想像できる。

が、しかしここでずっと突っ立っていたところで何もことは始まらない故に、意を決してドアノブを回し、中へと入った。

その少し前、理事長室にて。

「君たちは今日から同室、つまりルームメイトだ。君たち意外にも他に男女のペアの部屋もある。文句があるなら退学してくれて構わない」

とどのつまりは僕とステラさんが同室になり、それに気付かずには部屋に入った僕が、丁度ステラさんの着替えシーンを目撃してしまったことに始まる。

そして現在、怒ったステラさんと共に理事長室へと向かい、事情の説明を受けたところだった。

そしてその理事長の退学発言に、さすがのステラさんもまずいと感じたのか少し鎮火されつつあるも、しかしその視線は未だ僕を射殺さんとばかりに突き刺さっていた。

「で、でも！何か間違いがあったらどうするんですか!？」

「ほう、一体どんな間違いがあるんだる?」

「そ、それは……」

いやいや、それ完全にセクハラでしょう。

そんな酔っ払ったおっさんのような絡み方をしなくても。しかも王女様に。

そんなことを考えていると、キツとステラさんは僕をにらみ、三つの指を立てた。

「いいわ、同室の件、認めてあげる！でも三つ条件があるわ。話しかけないこと、目を開

けないこと、息をしないこと！」

「無理だよ!?それ僕もう死んでるよね!？」

「知らないわよ!そもそも王女である私の下着姿を盗み見て生きていられるだけありがたいと思いなさい!」

「それは謝るけどせめて息ぐらいさせてよ!？」

「嫌よ変態!私の匂いを嗅ぐつもりでしょこの変態!？」

「嗅がないよ!そんなに嫌ならがんばって口で呼吸をするから!？」

「嫌よ変態!がんばって私の息を味わうつもりでしょ!？」

「そんな考えに辿りつかなかったよ!!この変態!？」

「はっはっはっ」

「いやいやいや、助けてくださいよ理事長!

もうステラさん激おこじやないですか!

もう髪の毛なんてピンピンに立っってもうスーパーサイヤ人ですよ!？」

「どつちが変態よ!この変態!？」

突如、彼女の怒声と共に大量の高温の熱風が吹きあれる。

さすがAランク伐刀者だ。

そして被害を受けたのは僕だけじゃないようだ。

ドアの向こうから「アツツ」って聞こえてきた。大丈夫だろうか。

「まあまあ落ち着け、二人とも。ここで暴れて理事長を壊されてもいけないからな。伐  
刀者なら伐刀者らしく、勝負で決めたらどうだ？」

理事長がようやく助け舟を出してくれた。

「とうか遅すぎる気がするんですけど。」

「うん、それは公平でいいですね」

「はあ？悪いけど、私これでもAクラスよ？勝てると思ってるの？」

ステラさんが僕を睨み、威圧的な態度を取ってくる。

「けど、

「そのための努力はしてきたつもりだよ」

僕だつて僕なりに覚悟もあるし、信念もある。

負けれない理由もある。

それにこんなところで躓いているようではいけないんだ。

「…… 私が努力してないみたいに」

その眩きが僕に聞こえることはなかった。

でもステラさんの表情は先ほどと打って変わって苦しそうな表情をしていた。

しかし、そんな曇った表情は一瞬だった。

ステラさんはすぐに活力を取り戻し

「いいわ！でも負けたら一生下僕よ！犬のように従いなさい！」

「げ、下僕って。冗談だよね!？」

「冗談なわけではないわ！いいから、さっさと」

すると突然、すごい勢いのまま話すステラさんの言葉が途中で遮られた。

「すいませーん、理事長室ってここであつてますかー？」

あまりにも白白しすぎると演技とタイミングと共に、長い金髪のを後ろでくくった外国の人が入ってきた。

あまりに突然すぎて僕達の間で沈黙が宿る。

が、そんな中で思い出したかのように時計を確認しながら理事長が声を発した。

「おっと、そろそろだったな。すまない、気づかなかつた」

「お、ということはあるが理事長か。別にいいよ、なんとなく事情は察したし」

「すまないな、こいつらが思った以上に問題児過ぎたからな」

（あんたのせいだろうが!?!）

僕とステラさんの思いが重なった気がした。

「ま、とりあえず俺がエドワードだ。これから頼むぜ、理事長さん」

そう言つて僕達の横を通り過ぎ、理事長の前まで行くとフランクに手を出し握手を求

めた。

「すまなかつたな、見ての通り少し立て込んでいてな。迎えを寄越すのをすっかり忘れていた」

「いんや、大丈夫だ。ここの生徒会長に案内してもらったからな」

「そうか、それなら後で東堂にお礼を言っておかなくてはな」

理事長はそう言つて手を握り返した。

「というか、僕達の存在が空気になんだけど。」

「あ、あの、理事長。その人は？」

さすがに耐えきれなくなった僕は、理事長にその唐突に部屋に入ってきて場を凍らせた人物の紹介を求める。

「ああ、こいつはエドワード・エルリック。アメストリスからの編入生だ」

「アメストリスってというと、あの軍事国家の？」

「ああ、そこからだ」

アメストリス。名の知れたヨーロッパの軍事国家であり、世界でもトップクラスの軍事力や防衛力を兼ね備えた地球上最強と言われている国だ。

平和な国日本と共に、ある意味最も安全な国として有名である。

そんな国からの編入生、しかもこの破軍学園にだ。かなりのやり手だということは容

易に想像できる。

不意にとりのステラさんを見てみると、先ほどまでの勢いはどこに行ったのか、目を見開いてエドワードさんを見つめていた。

「どうしたんだい、ステラさん？エドワードさんをそんなに見つめて」

僕がそう言うと、ステラさんはこちらを見て軽蔑目で見ってくる。

「はあ？あんた、知らないの!?あのエドワード・エルリックを!?」

「そんなに有名な人なんだ？その、エドワードさんって」

「あんた、エドワード・エルリックって言ったら、最年少で国家錬金術師になった天才じゃない!?」

「国家錬金術師?」

「そこからなわけ!?信じらんない!!いい?国家錬金術師っていうのは……」

その後、僕は国家錬金術師についてステラさんから語られるのをしばらくの間、ただ一方的に聞かされ続けたのだった。